ハワイの冬の俳句

松　井　貴　子

はじめに

ハワイで英語によって詠まれた俳句の作品集が、1970年に刊行された[1]。作者のアネット・シェファー・モローはアメリカ本土出身の詩人である。この句集の特徴は、ハワイを詠んだ句集でありながら、従来の日本の句集と同じく、四季を意識して編集されていることである。温帯地方の気候を基準にして常夏といわれるハワイの俳句だからといって、すべて夏の句とするようなことはしていないのである。日本の俳句における有季定型は、この俳句集では、作品が春夏秋冬という四季の区分で分類されて収録されていること、そして、それぞれの句は、英語のシラブルで575の音節を持つ三行詩という形式であることによって表現されている。

ハワイで詠まれた俳句で、冬という季節に分類されている二十一句[2]について、英語の三行詩に即した翻訳と、日本語の俳句の形式に従った翻訳を試み、作品を通して、熱帯地方における冬の季節意識を探る[3]。

Ⅰ　冬という季節

春夏秋冬という四季が、それぞれに、ほぼ等しい期間を持って循環するのは、温帯地方の気候の特徴である。温帯地方の季節認識で冬という季節は、次のように捉えられている。

Winter weather is colder than any other season. There is usually rain or snow and winds can be strong.[4]

冬は一年のうちで最も寒く、雨風が強まる。他の季節よりも暮しづらい季節である。基本的には、このように認識されている冬であるが、次のようにも、捉えられている。

There are plenty of reasons to love winter. Yes, cool, cold or downright frigid winds may blow. And rain, snow flutters or a full-fledge blizzard may fall. But those are just good reasons to cozy up at home, without guilt about being at indoors.[5]

冬は冷え冷えとして寒く、恐ろしく厳しい寒風が吹くことがある。雨や雪が降り、猛吹雪になることもある。しかし、それだからこそ、外に出なければと思わないで、心置きなく、屋内に冬籠りをして、家で心地よく過ごすことができるというのである。

冬という季節は、英語圏では、次のような季節行事によっても、認識することができる。[6]

Christmas　クリスマス、12月25日。
Hanukkah　ユダヤ教の聖殿献堂の日、kislev月（ユダヤ暦の9月、グレゴリオ暦の11、12月）の25日から8日間。
New Year's Day　元旦、1月1日。
Presidents' Day　大統領の日（ワシントン誕生記念日）、2月の第3月曜日。
Valentine's Day　聖ヴァレンタインの祭日（愛の日）、2月14日。
St. Patrick's Day　聖パトリックの祝日（北アイルランドの休日）、3月17日。
Winter Solstice　冬至、12月21日または22日。
Kwanzaa　クワンザ（アフリカ系アメリカ人がクリスマスの代わりとする祝祭、12月26日から1月1日。
Groundhog Day　聖燭節の日（春の到来を占う。晴天ならば、まだ冬で、曇天であれば、春が近い。）、2月2日または14日。
Mardi Gras　告解火曜日、謝肉祭の最終日。

行事は、暦の上で人為的に定められたものである。行事が行われる時期が、毎年、同じであれば、季節が決まっているものとして、俳句の季語とすることができる。

Ⅱ 翻訳・翻句・評釈

1 冬のようなもの

冬の句の、最初の四句では、ハワイの風土、自然現象のなかに、アメリカ本土と通じあうものを見出して、句に詠んでいる。

Tall translucent waves
Roll in like clear jade panels,
Trail winter's white tress.[7]

高い半透明の波が
鮮やかな翡翠色の壁板のようにうねり、
冬の白髪を一房引きずる。

大波の翡翠に一筋冬の白

緑なす大きな波が壁のように高くうねるとき、その波頭は泡立って白く見える。その一筋の白さが、雪の白さを連想させて、熱帯の地に冬を感じさせている。

Is this winter here?
Where the snows, bare trees of home:
White sand; driftwood; me.[8]

これが、ここの冬なのか？
故郷では雪と枯木があったところに、
白い砂があり、流木があり、私がいる。

これが冬？雪は白砂枯木は流木

海浜に広がる白砂によって、地に降り積もった雪を思い起こし、そうして呼び覚まされた温帯での冬の感覚と熱帯での冬の感覚とつないで、併存させようとしている。流木が目につくのは、太平洋に囲まれたハワイらしさであろう。

Blowing cold salt spray,
Never-ending wet night wind,
Flutters landless pain.[9]

冷たい潮の水煙を吹き動かして、
決して止まない湿った夜風、
地場を持たない苦しみに打ち震えている。

寒潮に湿る夜風の震えゐる

ハワイの冬は雨季であり、一年の間で最も気温が低く、雨風が強い。その季節的な特徴を捉えて、ハワイの冬の句としている。

2 孤独感

そして、次の七句では、夜、誰もいない空間で感じられる孤独感を、ハワイの冬を感じさせるものとして詠んでいる。

Loneliness sites on
My shoulder, like a black crow.
Ah — come home, come home![10]

孤独が居座る
私の肩に、まるで真黒な鴉のように。
ああ、しみじみと痛感し、胸にこたえる！

肩に居る私の孤独黒鴉

孤独感を感じていること、孤独な状態でいることを、冬のイメージとして捉えている。鴉は冬の季語ではないが、「寒鴉」「冬鴉」という冬の季語があり、一年で最も寒い「寒」を含む冬の季節感と結びついて、荒涼とした寒々しさを感じさせる。

Footfall in dark room.
Alone. Damp skin, heartbeat. Wait.
No man, just footfall.[11]

真暗な部屋に足音がする。
居るのは私だけ。皮膚がじっとりと湿り、心臓がどきどきする。待ち伏せる。
誰もいない、ただ足音だけ。

汗と鼓動無人の部屋の足音に

孤独な状態に加えて、幽霊がいるような部屋の様子が詠まれている。幽霊の存在に冬を感じるのは、日本の感覚と異なっている。

Hidden bird trills songs
While winter rain falls on, on —
Sweet descant to drums.[12]

姿を見せないで鳥が囀る
冬の雨が降り続ける間—
美しい高音から太鼓のような音まで。

冬の雨季隠れ囀る高く低く

ハワイで冬に相当する雨季を詠んでおり、この句には、「囀り」と「冬の雨」の二つの季語が使われている。「囀り」は、日本では春の季語である。冬の季語と春の季語を併存させて、冬のなかに春の兆しが見られる様子を詠んだ句である。熱帯地方では、冬に隣る季節、春秋の風物が冬の間にも見られることがある。

Cold cliff where I stand
Shudders with each breaker's blow:
Wall 'round sea's old home.[13]

私が立つ冷え冷えとした絶壁は
風が波を砕く度に震える。
海の旧棲の周りの壁。

絶壁揺る冷ゆる波風海の旧棲

暖かさの消えた荒々しい自然の脅威、その厳しさが冬を感じさせている。絶壁に砕ける激しい波は、人を寄せつけず、そこは、海だけの世界になっている。

In winter, does it
Console or pain me that it's
Summer somewhere else?[14]

冬には、
どこか他の場所では夏であることに、
慰められるのか、苦しめられるのか？

苦か楽か夏のやうなる冬にゐて

太陽暦に基づいたカレンダーを共有していても、地域によって、季節的特徴は一様ではない。暦の上での同じ時期に対して、複数の季節実感が存在することを意識して詠まれた句である。

The moon! Full moon! Ah,
Reach your arms and hold me, so
I won't be lonely![15]

月よ！満月よ！ああ、
手をさしのべて抱きしめてくれ、それで
私は独りではなくなるだろう。

満月に孤独な我を抱いて欲し

この句でも、孤独感が冬の季節感につながっている。「月」「満月」は日本の季語では秋である。俳句では、通常、季重なりを避けて、一句のなかに同じ季節の季語を二つ使うことはしない。月光の白さ、冷やかな感じに冬の感覚を重ね、月という自然とつながることで癒しを求めている。

Night sounds: wind through leaves,
Panes rattle, music somewhere;
Always somewhere else.[16]

夜がざわめく、それは葉ずれの音、
窓ガラスがガタガタいう、どこかで音楽、
すべて、どこか他の場所でのこと。

夜の葉音玻璃窓音楽余所の音

孤独感に満ちた、離人症的な感覚さえ漂う句である。外界を知覚しても、自分とのつながりを感じられない状態にある。作者は、そこに冬を感じているのであろう。

3 生命あるものの存在

そして、さらに、次の三句では、生命あるものが存在することを期待できるものの、その存在を確たるものとして認識できない状況を、冬の句として詠んでいる。

Walk with me today
Beside the stones and brambles
And the wilted bud.[17]

今日私と歩いた
碑石と黒いちごの傍らを
芽が萎れてもいた。

今日歩く碑石と芽枯の黒いちご

碑石は動かず、何の感覚も持たない。そして、植物の芽は萎れている。日本の季語では、「芽吹き」は春であり、「草の芽」「ものの芽」「下萌」などの季語がある。「木苺」「バラ」は夏、「野バラの実」が秋の季語である。この句では、生命活動の停止が、冬らしいものとして捉えられている。

Friend's voice in nighttime!
So precious is the sound, I
Do not hear the words.[18]

夜に聞こえる友人の声！
その響きは千金に値する
その言葉は耳に聞こえてこない。

夜千金の友の声その言は聞かれず

孤独を癒してくれる友の存在は、かけがえのないものである。孤独感が強まる冬には、なおさらである。しかし、その孤独感が容易には解消されないのが、冬であるということなのであろう。

Black wind-swung tree leaves
On this solitary hill.
Nightlights twinkle through.[19]

風に揺れる真暗闇の木の葉
人里離れたこの丘の上で。
夜灯がちらちらと通り抜ける。

葉擦れ闇人離る丘を灯の過ぐる

真暗な夜、月明かりも星の光も、人も灯もない闇のなかで、人が来ない丘の木の葉が風に揺れている。明るさも人の温もりもない様子が、冬らしさを感じさせている。そこに、人工的な明かりがいくつも現れて、煌めきながら通り抜けて行った。灯の煌めきは、冬の冷気のなかで鋭さを増す。これは、日本の冬の季語「凍星」「冬銀河」「星冴ゆ」の感覚に通じる。

4 心象風景

次の五句は、自然物に共感した心象風景を詠んだものである。冷たくて激しい冬の雨風、冷やかに見える冬空、このような冬の気象現象に、心の苦しみや痛み、孤独感が交響している。

Samurai night winds
Slashing at black rushing trees
Unhorse contentment.[20]

侍のような夜風
突進してくる黒い木々に斬りつけている
打ち倒して満足感を引きずり下ろす。

黒木斬る武士(もののふ)の風満たされず

荒く激しい風、黒々とした木々が冬のイメージを醸し出している。死によって終わる戦いの空しさ、希望のなさが、何も生み出さない、荒れすさんだ冬の寂寥感に重ねられている。

Wind rushes through night.
Black sky — it will rain. Cold wind!
I call my dog close.[21]

風が夜通し吹き抜ける。
真暗な空—雨が降りそうだ。何という冷たい風！
犬を近くに呼んだ。

犬を側に闇夜の寒風雨催

嵐の前の恐怖、心細さを強く感じていればいるほど、それを慰めてくれる飼犬の温もりを強く求める。小型犬であれば毛並の柔らかさ、中大型犬であれば番犬となる心強さが、そこに加わる。

Pain — most lonely thing.
Only winter yearns, and I:
Where is the morning?[22]

苦悩—最も孤独なこと。
冬だけが同情する、そして私も
夜明けはどこに？

冬憐れむ孤独な苦悩夜明け欲す

孤独な苦しみを冬のイメージとしている。春の暖かさは芽吹きを、夏の日ざしは生命力に満ちた成長を、秋は実りをもたらす。春から秋にかけては、生命が再生し、成長し、充実するが、その後、冬には、生命の終焉を迎える。冬はつらい季節である。そこに苦しみが共感を求めている。

Free bird of passage
In sail to your summer land.
Were I such a bird![23]

自由の身で渡って行く鳥は
あなたのいる夏の国に向かっている。
私がそんな鳥であったら！

君のいる夏の地に行く鳥ならば

雪や氷に閉ざされる冬には、外で自由に活動できる夏が恋しくなる。行動が制限され、閉じ込められているという感覚が冬を思わせ、夏を望むのである。

Day-white sky above,
You are more cold and distant
Than black secret night.[24]

日中の透明な上空、
冷たさと疎遠さがまさる
真暗で見えない夜よりも。

闇夜より冷疎や光透く空は

冬を冷たさと疎遠さを持つものとして捉えている。透徹した光は、不純物のない極地の氷雪に届く太陽光のようでもあるが、これは、ハワイには存在しない。冬のハワイは雨季である。雨に洗われた後の空気を通る光に、氷雪上の光に通じる感覚を得たのかもしれない。

5 ハワイの冬緑

冬の句の最後の三句では、アメリカ本土でならば、春に感じられる生命の再生を、ハワイの冬のなかに見出している。一年で最も気温が低く、晴天ばかりではない季節であるが、ハワイの冬の雨季は、植物を蘇らせる。この現象は、日本の季語では、「喜雨」という夏の季語が相当する。農作物の実りを約束する雨が、ハワイでは冬に存在し、温帯地方よりも一足早く、生命の再生をもたらしてくれる。

Moonlight paints the floor.
A gecko chirps his comment.
Morning will come. Sleep.[25]

月光が床に色を塗る。
守宮が声を挙げた。
朝が来る。眠るのだ。

守宮鳴く月光の床明近き寝る

夏らしさを象徴する太陽光の強さ、夕陽の赤さに対比して、月光の白さ、静けさに冬を感じたのであろう。日本の歳時記では、「月光」は秋、「守宮」は夏の季語に分類され、季節感が異なっている。

Birds, too, must go home.
Though you and I will soon wed,
Earth, wake green again.[26]

鳥も家に帰らなければならない。
あなたと私はもうすぐ結婚するだろうけれども、
大地よ、また再び草の緑を蘇らせてくれ。

鳥は巣に婚近く草蘇れ

ハワイの冬は雨季であり、植物の緑が蘇る。ハワイで日系人が作る日本語俳句では、ハワイらしい季語として「冬緑」が使われている。ハワイでは、生命の再生が冬に起こるのである。日本の季語では、「鳥帰る」[27]が春である。

Winter, it is time:
Strip worn hag-leaves from the trees —
Come, prepare the bride.[28]

冬よ、その時が来た。
擦り切れた老婆のような木々の葉を落して—
さあ、花嫁の支度をしよう。

時満ちて葉落とす冬の嫁支度

冬の結婚は、再生への予兆を意味する。再生をもたらす春の訪れに先立つ、新たな生命活動の始まりである。この句では、冬を擬人化して詠んでいる。ハワイでも、三千メートル級の山頂では、冬に雪が降ることがある。雪の白さが花嫁の白色を連想させ、結婚と新たな生命の誕生を予感させているのである。生命の再生と循環をハワイの冬の特徴の一つとして、実感を持って認識したことが、この句の土台にある。

おわりに

ハワイは熱帯に属している。しかし、その風土に冬を感じた詩人によって、ハワイの冬を詠んだ英語俳句が作られた。詩人が捉えたハワイの冬には、雪を思わせる白いものと冷たい雨風、真暗闇と孤独感、生命感のないもの、心象風景、生命力のある冬緑がある。

アメリカ本土に生まれ育った詩人にとって、ハワイでの句作は、異質の風土を異質の詩形で詠むことであり、それによって作り出されたのは、使用言語のみが同質性を保っている詩作品である。作者が意図した、詩の普遍性、人間の同一性を、読者に伝えることが、このような俳句によって、具現されているのである。

その季節認識の特徴は、異質の風土で実感したものを既知のものと結びつけて季節を認識することに始まり、具体的な実感を直接に表わすのではなく、心象風景によって季節を表現することを試み、現地の気候風土や自然現象の特徴を理解して句にとりこむことへと、広がりを見せている。当地で、その季節に特徴的な現象を表わす言葉は、新たな季語として機能し得る。それぞれに特徴のある地域ごとの気候風土、自然現象を相対化する視点を獲得することで、異質性と同時に同質性を見出し、季節認識の普遍化に向けて、その本質を探ることができる。

---

1 Morrow(1970).
2 Morrow(1970), pp.45-52.
3 ハワイの冬の句については、次の拙稿で、概説的に言及した。
松井貴子 (2010)「ハワイ俳句のためのノート」『外国文学』59号、82頁。
4 Pelusey(2007), p.10.
5 Chandoha(2004), p.7.
6 Prisant(2004), p.143.
7 Morrow(1970), p.45.
8 Morrow(1970), p.45.
9 Morrow(1970), p.45.
10 Morrow(1970), p.46.
11 Morrow(1970), p.46.
12 Morrow(1970), p.46.
13 Morrow(1970), p.47.
'round は around の略。
14 Morrow(1970), p.48.
15 Morrow(1970), p.48.
16 Morrow(1970), p.48.
17 Morrow(1970), p.49.
18 Morrow(1970), p.49.
19 Morrow(1970), p.49.
20 Morrow(1970), p.50.
21 Morrow(1970), p.50.
22 Morrow(1970), p.50.
23 Morrow(1970), p.51.
24 Morrow(1970), p.51.
25 Morrow(1970), p.52.
26 Morrow(1970), p.52.
27 秋冬に飛来し、越冬した鳥が、春に北方の繁殖地に帰ること。

[28] Morrow(1970), p.52.

参考文献

松井貴子 (2010)「ハワイ俳句のためのノート」『外国文学』59 号、75-84 頁。

References

Anderson, Jim(2004) *Fall: Seasons in the Home*, Creative Home Arts Club.

Blodgett, Bonnie(2004) *Summer: Seasons in the Home*, Creative Home Arts Club.

Chandoha, Walter(2004) *Winter: Seasons in the Home*, Creative Home Arts Club.

Evans, Mary(2004) *Spring: Seasons in the Home*, Creative Home Arts Club.

Morrow, Annette Schaefer(1970) *Haiku of Hawaii*, Charles E. Tuttle Company.

Pelusey, Michael and Jane(2007) *Spring: The Seasons*, Macmillan Education Australia.

Pelusey, Michael and Jane(2007) *Summer: The seasons*, Macmillan Education Australia.

Pelusey, Michael and Jane(2007) *Autumn: The Seasons*, Macmillan Education Australia.

Pelusey, Michael and Jane(2007) *Winter: The Seasons*, Macmillan Education Australia.

Pelusey, Michael and Jane(2007) *The Dry: The Seasons*, Macmillan Education Australia.

Pelusey, Michael and Jane(2007) *The Wet: The Seasons*, Macmillan Education Australia.

Prisant, Kathleen(2004) *The Holiday Table: Crafts & Cuisine*, Creative Home Arts Club.

Soule, Amanda Blake, Soule, Stephen(2011) *The Rhythm of Family: Discovering a Sense of Wonder through the Seasons*, Shambhala Publications.

本研究は、平成 21 － 23 年度科学研究費補助金(基盤研究 C)「季節感、季節認識に関する比較文化研究—俳句の国際化を視座として」による成果である。

Haiku of Hawaii in Winter

MATSUI Takako

Abstract

The main part of this paper consists of a translation of English language haiku composed in Hawaii in winter into Japanese in traditional haiku style along with an interpretation of the work.

Hawaii belongs to the tropical zone, but the author, Annette Schaefer Morrow, felt it was winter in Hawaii. She perceived Hawaiian winter through the use of images of white snow, cold rain and wind, darkness, loneliness, lifelessness, as well as a lively fresh green that is the most characteristic phenomenon of winter in Hawaii.

Morrow first recognized Hawaiian winter when she associated characteristic phenomena of the winter season in Hawaii with the phenomena that she felt were characteristic of the features of winter on the US mainland. Based on these associations she understood what characterized Hawaiian winter and composed haiku that included references to the Hawaiian climate and natural phenomena. She described the feeling of Hawaiian specific seasonal words, winter's green. She finally juxtaposed Hawaiian seasonal feelings in winter with her own seasonal feelings born of her experience of winter on the US mainland.

Morrow's Hawaiian haiku in winter describe particular phenomena but at the same time they contain the generality of human feelings. This feature of her haiku is derived from her own belief that poetry has a universal nature.

(2011 年 11 月 1 日受理)